

県立広島大学・ひろしま美術館連携公開講座

イサム・ノグチとその周辺

ひろしま美術館の企画展「イサム・ノグチ～その創造の源流～」にちなみ、ノグチに影響を与えた作家・画家との関係や、彫刻、建築、庭園、日系アメリカ人社会など、ノグチの創造の源流とその周辺をめぐる講座を開講します。

日時

平成25年9月21日・9月28日・10月5日(土) 13:00～15:10

会場

サテライトキャンパスひろしま（広島市中区大手町1丁目5-3 県民文化センター）

9月21日 (土)	13:00～14:00	イサム・ノグチの彫刻と建築	県立広島大学保健福祉学部講師 吉田 倫子
	14:10～15:10	イサム・ノグチと日本の心	ひろしま美術館学芸部長 古谷 可由
9月28日 (土)	13:00～14:00	ハイブリッド・アーティストと 「日系アメリカ人」	広島大学名誉教授 山代 宏道
	14:10～15:10	イサム・ノグチとヨーロッパ	ひろしま美術館主任学芸員 水木 祥子
10月5日 (土)	13:00～14:00	イサム・ノグチと庭園	県立広島大学人間文化学部教授 天野 みゆき
	14:10～15:10	1930年代のイサム・ノグチ	ひろしま美術館主任学芸員 渡辺 純子

募集人数

80名程度

受講料

無料

対象

どなたでも

申込方法

往復はがきの往信面の裏に①郵便番号、②住所、③お名前、④ふりがな、⑤電話番号を、返信面の表に受講される方の郵便番号、住所、お名前(〇〇〇〇)様をご記入の上、平成25年9月5日(木)(消印有効)までに次のところにお送りください。

〒734-8558 広島市南区宇品東1-1-71
県立広島大学地域連携センター「イサム・ノグチ講座」係
電話(082)251-9534

受講案内は締切日以降にお届けします。なお、申込多数の場合は抽選となることがあります。

※申し込みにあたってお寄せいただいた個人情報は県立広島大学公開講座以外の目的には使用しません。

主催

県立広島大学地域連携センター・公益財団法人ひろしま美術館

「イサム・ノグチとその周辺」概要

吉田倫子「イサム・ノグチの彫刻と建築」

彫刻と建築は時に互いの個性を打ち消す存在になることがあります。しかし、イサム・ノグチ自身は、彫刻家と建築家の関係を重要なパートナーととらえ、彫刻と建築によって、より意義深い空間となることを目指して、建築家と多くの作品を生み出してきました。彫刻と建築のさまざまな関係をみながら、イサム・ノグチが目指した彫刻と建築のコラボレートによる劇的で意味ある空間とはどんなものかを味わっていききたいと思います。

古谷可由「イサム・ノグチと日本の心」

日本人の詩人・野口米次郎を父親にもつ日系アメリカ人であったイサム・ノグチは、幼少期を日本で過ごしました。また、すでにアメリカで彫刻家として活動をはじめていた27歳の頃、日本を再訪し、京都を巡っています。戦後は度々訪日し、最終的には石の産地である香川県牟礼町にアトリエを設けて、ニューヨークのアトリエと行き来しながら最期まで精力的に制作を続けました。そのノグチの作品に流れる日本の心を読み解いていきます。

山代宏道「ハイブリッド・アーティストと“日系アメリカ人”」

イサム・ノグチは「日系アメリカ人」なのでしょうか。同時代の多くの日系二世たちと比較するとき彼の特異性が浮かび上がってきます。ノグチをハイブリッド・アーティストと位置づけることができるのではないのでしょうか。多様な要素を含みながら複合的なアイデンティティーをもったノグチと日系アメリカ人社会との接点は多くはなかったようです。なぜでしょうか。かれらの異同を検討しながら両者の関わりを探ってみましょう。

水木祥子「イサム・ノグチとヨーロッパ」

1926年、ブランクーシの展覧会に感銘を受けたノグチは抽象彫刻に開眼し、翌年パリに渡ります。半年ほどブランクーシに師事し、彫刻家としての基本的な精神を学ぶと同時に、形態の単純化など、作風にも大きな影響を受けました。また、当時のパリには前衛的な芸術家が世界中から集っており、その只中に身を置きながら、ノグチは様々な最新の芸術動向を吸収しています。当時のヨーロッパのモダニズムの動きを紹介し、そこからノグチが受けた影響を考察します。

天野みゆき「イサム・ノグチと庭園」

1959年に三年半の歳月をかけてユネスコ庭園を完成させたことにより、ノグチは自分が進むべき道を見出したと述べています。それは実際の仕事を通して庭園造りに関する知識を深めること、特に、彫刻と空間の関係を追求することでした。1960年以降、ノグチは広大な庭園を次々と創造していきました。自伝やエッセイにおけるノグチ自身の言葉を手がかりに、彼が庭園にかけた情熱と想いを考察します。

渡辺純子「1930年代のイサム・ノグチ」

1931年、中国、日本を旅してニューヨークに帰ったノグチは、「アメリカに熱中した」と振り返っています。1929年の大恐慌から太平洋戦争へと向かう1930年代は、アメリカの芸術家たちが、否応なく政治や社会ときり結ばなければならない時代でした。ノグチも例外ではありません。“日系人”でもあったノグチの苦悩は一入だったでしょう。しかし、その苦境から、ノグチは自身の芸術の方向性を見極めていきます。今回は、1930年代のアメリカの美術状況を紹介します、ノグチの制作の行方を考えたいと思います。